
ネガティブハネムーン

MONDOERA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネガティブハネムーン

【Nコード】

N8522P

【作者名】

MONDOERA

【あらすじ】

世界生成の際、正の気は上に溜まり、負の気は下に溜まった。そして、その2つの気がそれぞれの世界を創った。正の気により創られし世界の一つ、『夢幻界』である事件が起ころうとしていた。

登場人物紹介（前書き）

人生初のオリジナル小説です。拙い小説ですが、宜しく願ひします。

登場人物紹介

・コルト・レイフィール

フォトス村に住み、その村にある『フォトス学園』に通う小等部4年生。元気な10歳の女の娘。頭脳はあまり良くないが、気さくで暢気な為、友人は沢山いる。図書室でウォルネ・アクリウスと出会い、話をしてから親友になった。晶術においては、平均よりやや下であり、学園の教科書通りの電気系の晶術を使うが、下級術しか使えない。しかし、小等部の4年生の生徒ではだいたい下級術しか使えないので、平均的な成績である。

・ウォルネ・アクリウス

フォトス村に住み、その村にある『フォトス学園』に通う小等部4年生で10歳の女の娘。頭脳明晰であり、神童とも呼ばれたが、無口で人間関係が下手なので、友人はあまり居ない。コルト・レイフィールとは、学園の図書室で話し掛けられてから知り合い、親友になった。水系晶術を得意とし、水系晶術においては、下級晶術から上級晶術まで、全ての晶術を扱える。最近は自分で開発したオリジナルの晶術を制作している。趣味は心理学関係の書物の読書である。

登場人物紹介（後書き）

どうも、作者のMONDOERAです。初めてのオリジナル小説との事なので少し不安もありますが、これまで通り頑張っていきたいので、宜しくお願いします。今回は登場人物紹介のみですが、出来るだけ早く更新出来るよう執筆をしていきたいと思います。

用語事典

・エーテル

夢幻界に存在する謎の物質。人体にも存在する事から、その正体は一種の精神子スピリットと言われている。生物（高精神体）に潜行する性質を持ち、その生物の許容範囲を超える量のエーテルを取り込んだ場合、凶暴化する。これにより、凶暴化した生物をモンスターと言う。人類は之に対し、エーテルの力を利用した晶術なるものを開発し、モンスターの暴動に備えた。

・晶術

エーテルの力を利用した技術。『火』『水』『電気』『地』『光』『風』の6つの属性に分けられる。それぞれの属性の相性は五行に準ずる。『火』は火気に属し、『水』は水気に属し、『地』は土気に属し、『光』は金気に属し、『電気』と『風』は木気に属する。また、それぞれの属性はそれぞれ、五行とは別の2つずつの性質を持つ。

「火」は『炸裂』と『集中』の性質を持ち、「光」は『集束』と『硬質』の性質を持ち、「水」は『流体』と『尖鋭』の性質を持ち、「雷」は『拡散』と『閃光』の性質を持ち、「風」は『広域』と『波動』の性質を持ち、「地」は『保護』と『始祖』の性質を持つ。

・五行

中国の陰陽五行思想における、この世に存在する全ての物質の事。五気とも言われる。火気、水気、木気、土気、金気の五つの属性に分かれ、それぞれが一定の性質を持っており、循環する相生と相剋等の関係を持つ。

・夢幻界

正の気により創られし世界の一。主にエーテルによる技術が盛ん。

・宇宙始祖の神話

『宇宙生成の初期段階で、正の気が上方に溜まり、負の気が下方に溜まり、それぞれが2つの世界を創った。正の気は、『万象界』、『夢幻界』を創り、負の気は『妖界』と『暗黒深界』を創った。』と伝えられる神話。

・神仏騒乱

約20年前に勃発した、神と名乗る者が引き起こした乱。とある4人組によって解決された。

・物質子

この世に存在する全ての物質を粒子として見た単位を物質子^{マトロン}と言う。精神子の存在が確認されてからこの単語が発生した。

・精神子

生物等の精神を粒子として見た単位として、精神子^{スピリトロン}と言う。現在これらの研究が進められているが、まだブラックボックスが多く、解明仕切れていない。

高精神体

動物や人間等の高い精神子含有量を持つ物体の事。霊体や妖怪が非常に高い含有量を誇り、霊体、妖怪、人間、動物の順に精神子^{スピリトロン}の含有量が多い。

・フォトス学園

小等部、中等部、高等部に分かれており、更に武術科、魔術科に分かれている。小等部は武術科、魔術科には分かれておらず、1クラス5、6組に分かれており、6年で小等部は卒業する。中等部から

先は武術科、魔術科に分かれていて、それぞれ3クラスあり、3年で中等部は卒業する。高等部はそのままの科で進み、それぞれ3クラスあり、3年でこの学園を卒業する。

噂

夢幻界の平凡な村、『フォトス村』。そこにはこの夢幻界には数少ない学校があった。その学校は、『フォトス学園』という学校であり、総勢3872名の生徒が通い、30名余りの教職員が通っている。そして、その学園の小等部4年生の2組に、『コルト・レイフイル』が居た。『コルト・レイフイル』は黒髪のショートヘアをしていて、上は、半袖のトレーナーの下に薄手長袖を着たような服で、下半身は、短パンのジーンズを穿いていた。

「ねえねえ、『交感神経』って知ってる？」

と、コルト・レイフイルがとある友人に訊いた。すると、その友人が応える。

「は？何その『交感神経』って？」

と、その友人がコルト・レイフイルに訊き直した。

「いや、あのー、ウォルネちゃんに聞いたんだけど、よく解らなくて。」

と、コルトが言った。すると、その友人は言う。

「ウォルネちゃんって、あの『ウォルネ・アクリウス』の事？」

その友人のその言葉を聞いたコルトは喋る。

「え？そうだけど。」

そう言っていると、友人は言う。

「あの子、暗くて嫌じゃないの。」

と言うと、コルトが反論する。

「暗いんじゃないくて、ただ無口なだけだよ。」

と、コルトが言っていると、その友人は、

「はいはい。」

と、流した。

やがて、授業が始まったので、コルトは自分の席に着いた。
その授業をコルトはあまり聴いてはいなかった。

45分後、コルトは、同じクラスにいる『ウォルネ・アクリウス』
に訊いた。その『ウォルネ・アクリウス』は、青髪のショートヘア
で白と赤と紫の色をした長袖を上半身に着ていて、その長袖は、紫
色をした袖の所がフリルになっている。下半身はこれまたフリルの
付いたスカートを着用していた。『ウォルネ・アクリウス』は、全
体的にヒラヒラした服を着ていた。

「ねえ、交感神経って結局の所なんなの？」
すると、ウォルネが応える。

「ああ、それは、副交感神経とともに、高等脊椎動物の自律神経系
を構成する神経で、脊柱の両側を走る幹から出て、内臓や血管・消
化器・汗腺などに分布している神経であり、心臓の働きの促進、血
管の収縮、胃腸の働きの抑制、瞳孔の散大などの作用がある神経よ。」

ウォルネがそう言ったが、コルトは解らなかった。

「いや、あの、もっと解りやすく……。」

すると、ウォルネが説明する。

「えー、交感神経が優位状態になると、体中に通常より多い血液が
全身に送り込まれて、心理状態が高次状態になる。つまり、興奮し
たり、怒ったりする事よ。」

ウォルネがそう言うときコルトが言う。

「んー、なんとなく解ったかな……。」

と、コルトが呟いた。すると、コルトはウォルネの読んでいる本が
目に付き、ウォルネに尋ねた。

「ねえ、その読む本なんなの？」

すると、ウォルネは応える。

「ああ、これ？これは、心理学の本よ。」

ウォルネはそう応えながら、表紙をコルトに見せた。表紙には、
『10歳からの心理学』と書かれてあった。

「ねえ、心理学って面白いの？」

コルトがウォルネにそう尋ねると、ウォルネは応える。

「うん、私にとっては面白いけど、コルトにはちよつと難しいんじゃないかな？」

ウォルネのその言葉を聴いたコルトは、反論する。

「そんな事ないって！ちよつと見せてよ！！」

と、コルトは叫ぶと、ウォルネの本を取った。そして、パラパラとページを捲り、読んでいった。数秒すると、ウォルネにその本を返して言った。

「駄目。全然解んない。」

コルトのその言葉を聴いたウォルネは、言う。

「まあ、この本は、子供向けには出来てないからね。」

ウォルネがそう言うのと、コルトがウォルネに尋ねる。

「じゃあ何でウォルネちゃんは、解るの？」

コルトがウォルネにそう訊くと、ウォルネは応える。

「え、それは、まあ、慣れてるからね。」

ウォルネがそう応えると

「慣れてるね・・・。いいなあ頭が良くて。」

と、コルトが言った。すると、ウォルネが言う。

「子供の内からそんなに頭がよくても、そんなに良いものじゃないわよ。」

ウォルネがそう言うのと、コルトは呟く。

「そういうもんかなあ？」

と、コルトが呟くと、コルトは数秒後、思い出した様に喋る。

「そういえば。最近ここら辺で人攫いがあるみたいだね。」

コルトがそう言うのと、ウォルネがその言葉に応える様に言う。

「そうね。正しくは88日前から、10歳程度の男女が誘拐されて

いる事件ね。まだ犯人が捕まっていないどころか、依然として犯行は続けられているわ。確認されている段階でも、300人近くの被害者が出ているわ。」

ウォルネがそう言うのとコルトが言う。

「へえ」。よくそんな詳しく知ってるね。」

コルトがそう言うのと、ウォルネは言う。

「そんなの常識じゃない。誰でも知ってるわよ。」

ウォルネがそう言うのと、コルトは心の中で突っ込んだ。

（いやいや、さすがに正確な日付や正確な人数までは知らないですよ。）

コルトがそう思った数秒後、始業ベルが鳴った。

するとコルトは席に着き、授業を受けた。

数時間して、学校の今日の授業が終了し放課後になった。すると、コルトはウォルネの机を見た。しかし、ウォルネはいなかった。コルトはバッグを持つと、図書室へと向かった。

やがて、図書室に到着したコルトは、図書室の中を見渡した。すると、図書室の奥の方にウォルネがいた。コルトは、ウォルネに向かって行った。ウォルネの目の前まで来ると、コルトはウォルネに話し掛けた。

「やっぱりここにいた。ウォルネちゃん移動するの早すぎ。」

コルトがそう言うと、ウォルネが応える。

「うん、いつも放課後は此处に居るし、此处が一番落ち着くからね。」

ウォルネがそう言った。コルト達がいる図書室は、小等部と中等部と、高等部の生徒が利用出来る図書室であり、低学年向けの本から大学の参考書まである、比較的規模の大きい図書室であった。なので、小等部の生徒よりも、大学受験を控えた受験生の方が多かった。

コルトは、暫く、ウォルネが読んでいた本と一緒に読んでいたが、殆ど解らなかつたので、先に帰る事にした。

「じゃあ、ウォルネちゃん。私そろそろ帰るね。」

コルトはそう言うと、図書室を出ようとした。すると、ウォルネがコルトの服の裾を掴み、引き止めた。

「待って、私も帰るわ。玄関で待ってて。」

ウォルネがそう言うと、コルトは頷き、昇降口へと向かった。

一方ウォルネの方は読みかけの本を借りると、帰り支度をした。

数分後、コルトは、昇降口に到着し、ウォルネを待った。

そして、数分後。

「つつつつ!!」

後頭部辺りに強烈な痛みを感じたコルトはそのまま意識を失った。

暫くして、ウォルネが昇降口に来たが、コルトはいなかった。

「・・・・・・・・コルト?」

ウォルネはそう呟いてコルトを捜したが、何処にもいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8522p/>

ネガティブハネムーン

2011年11月17日05時43分発行